

芳
新
集

五
編

850 (10)

俳諧資料カード	
年代	享永三辰本
編者 (筆者)	有郎
書名	芳新集五編
備考	(7)

(下垣内蔵)

序

心正しんれを物とて誠の至はるのみなり云の業も
自ら影を射す一いつ即是也されも又七五七の
徳名いひまやれ其謀そのいひ人の心一徹
可き誠法をあやと徳の孤をいふ系如し
わららぬまをいふありとくあひら相まし
凡そまをいふまをいふありとくあひら相まし
まをいふ乃風原をまをいふ系如し
たをいふありとくあひら相まし

吳市阿賀北五丁目三十三番八号
下垣内和人
電話〇八三三十七一九八五四番
〒737



雪見を程々備へば中、寺
 明々夜乃目よくに春風はるる危
 多し、那美大塔の色まや初茄子
 在川や程々、くそ、おり、後里
 そ物、ま、り、惜、む、人、な、し、ま、り、物
 り、く、く、く、く、向、癖、や、ま、り、梅、の、色
 ち、れ、丈、の、色、ま、り、梅、の、色、ま、り、岸、の、花
 明、め、万、を、ま、り、ま、り、ま、り、急、集、の、春
 梅、通

考と我存る方うゆつ、ま、り、
 乾やる、潮乃、高や、ま、り、松、美
 枝た、ま、り、電、り、飛、り、あ、り、梅、の、色
 又位、の、火、乃、空、中、消、く、ま、り、雲
 自然、枯、乃、寂、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 梅、ま、り、ま、り、月、如、出、ほ、ま、り、ま、り、
 山、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、乃、瓦、立
 難、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
 九、起

岱子

月坡

然府

寒々

窓丸

哺月

東樹

梅通

芥舎

文翠

松雨

禾明

管明

宿裡

月郷

九起

水の音や波留るる山あり
 ありと木や芳の出合の如く
 楠一本ふもたしとて心太
 是子くも脱もるる一為相好
 黄鳥や照若く尺をハかり舟
 橋くもまじし煙る所や萩の紫
 一くも船や夏乃すを籠の声
 月代や若くもまじる風の音
 萩 里 三 里 花 重 岳 浪
 葉 玉 木 水 嘉 鳳 節

物くもまじしとてまじる風の音
 萩 一ツまあれ流や、まじるも
 其くも地のまかしくもまじる
 木をまじり流るる尺をハかり舟
 是くも脱もるる一為相好
 川風乃すもまじるもまじる
 活むの音たぬら舟 萩 湖 風
 夕、まじるもまじるもまじる
 萩 一 花

蓬萊の傍や禱とまきへ 廟 以外
奇、くさるる松羽ありや雪の松 又音
青柳乃多ふとくや雨乃物 月華
木くくや扱へ守人乃あしは里 札原
吟の子は浮葉をばきくはきれ林 尾程 虫 淵
極込の浮少くし砂あり萩のむ、 狐 南
波くくめまきの極招や月と梅 有 節

有 節
あ仙や庭とたししの崖つくり
霧の少き乃日結出まら声 虫 淵
船上里教の白きをまきり提く
難 負 提くや結のゆりやまき 節
一簾の月尺とありしは僧ひ
的 場 乃 うららのまきり為 所 淵

高きく袴やとと新海原

かゝりの河津もやまゝ世をわら

知已乃西よるまきむし筋

身も物もらの夜の出つゝあ

是らもあふ風もつゞき白向

籠も及もまゝく鳩の巢乃月

相作もまゝに是地もむけり

款を白く候あこの居成る

新

新

新

新

新

新

新

新

術も氣もたもしくま結むせう

田もも甲もおれ一枕乃日

救もあき候若もむに若ありて

いももももるくは室釋の音

星の空もかうも静くもさ進き

伝流の雨も美濃の川も

相もこれに基もくくして空笑ひ

増もこれに基もくくして空笑ひ

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

新

取きくも密柑もくも此意式を

きくも思ふもくもくおく新

山代もく知も猪退ふ世徳なり

山代の是くも様を所てき

若手もく六初月くも所の椿も

折おく萩乃おもるる風

恒ゆもく若も及もぬ所加持も

あそむて満守疱瘡の仕あり也

節

節

節

節

節

節

節

節

予加減りかへくもまるる生尾

一之居るもくも折守地崩

若くも位も相入吉やき

此域の如も若もきき喜定

うらみ海木の云沃もくもお持も

掛もく甘もりにそたつ物子

節

節

節

節

節

節

大和

阿乞〜〜〜〜〜
芳吉

灣子や小海を〜
墨居

い〜村を出入山振や蕨と〜
出鏡

高振つま〜の甲斐ありけ〜
猪油

二将〜木槿ら〜や物攸和衆
松好

甲〜〜め新付〜
松玉

撰付

任〜や董振〜
鼎左

植付や進いた〜
五緑

破岩や水乃果披にあ〜
月桂

ひ〜あ〜
素屋

田〜り〜
松崎

を〜難やあ〜
猪皮

黄〜り〜
乙鴉

〜寸〜
豫兒

いさびしく素足にぬや夏の雨 水舟

五月雨や花をらんせし清き 葉舟人

葡萄のまろしむや凡そ被るを 海米

まみやに梅の木を影をて子規 切奏

すりし流石なれは鳴りて水煙子 糖人

水差しく底をいせき新茶を 夜漕

新雲の影より伝きそとち舟 よね女

是能や毎りしき物の志 虫舟

茶女の物まじけやまつのを 兼久里

そつむきき舟志なり十日菊 太乙

そそ先く意依振出や物心伊賀 喜瓜

たひ人の癖にまじり夏のう 二交

かあうらう伊賀舟歌く山家子 玉舟

伊勢

空をくれ沸りやひくそのがね 只青

いづ隈もくわそ舟 九も結露 松青

消のく新星をかきく物まきこ
六川

夕息子いさく深や水あり
在竹

人ゆき脊中照らこ目今こ
山素

喜くと節もまきこいも
の喜

晴うちは姿乃尺文まきり
千畝

冬物りゆりまきこや土用子
素江

雪際に舞く万花あまき高の山
冨松

菖あまき竹のまきこ牡丹子
梅西

尺布子の木こりうさやほほ
昌風

思ふはあつる先乃初り礼
翠玄

見侍せき一葉さきこもつ磨
米山

こりこねも月にあつるゆほほ
在法

竹極のいさきまきこいさ
時飛

静やこりこねをわれまきこいさ
翠梅女

まき月よこる素まきこ梅の毛
美川

晴りゆき物まきこ日まきこふ如
魚雨

算し居人にも怖れ暮の鴨 菖花

親鳥乃まよとゆき守浮葉が 山友

政変や憂も病もせぬふくを 雪鳥

月の方まよとて浮やあまの鳥 梅笠

井水より夕ある家の柳を 霞汀

谿たると成かまてまよとてくろ鳥 柳橋

川当りて遊りぬありけむ揚 寒翠

佃ちれりまよも是揚の竹り危 藻魚

来りや否守をわねの鳥隠れ 檀石

築山の女もまよむすきさる 墨法

風形より方まよまよやたり池の鴨 柳糸

実り成るとまよも誰まよ橋が 志 不遷

伊凡の心もまよとて一溪の柳 新鳥

尾張

月夜も思ふとて鳥の麦の杖 黄山

出代やあり付まよとての旅り詠 西石

為月や河を穿ぬる舟一葉

梅裡

相角乃砂掃おろすうきく舟

一傳

春りや唇のうきく草あそひ

醉雨

片舟くまも場中やたむしる

庭知

遊つらゝ土跡の土やくるあそひ

の仙

取そぬ振元の舟やかきつら

静嘉

振乃雨新奈もあそひ一日か

静嘉

あそひのくま起あそひ一日か

三声

いし初る萩のけしや灯とらば

篤志

揺向く離れよ燈やまつるのむ

楢水

行うらゝつらゝそそや若乃花

芦江

そそけと是ても舟上夜あそひ

貴朴

櫛うらゝつらゝ河を穿ぬる舟

綺川

舟あそひ筑屋の庭やこゝろ

芳臺

二之軒奈屋を穿ぬる舟

又峰

庭石りのやそそ舟あそひ

鬼尺

連くくゆきい入やう矢あぢく 李曠
 海くりおきりく 匠く響ひ 思文
 寒月やうんくほあき枝のほき 市書
 枝曳く柄の何くやおきうれ 鳥羽
 素の芽やまきまて 高れ力作 右標
 々々くさのくくさや杜あ 月庭
 二遠後
 うくくれいそ 佛き大相くる 蓬字

給くく庭木くねくほおきま 三岳
 葩くく酒くくかきす葉乃れ を江 杜水
 莖くくまきにけりしを福書竹 後江 傳山
 武蔵

是すくく扇なくくくくを月の月 龜洞子
 けくめくく扇くくくくく核が 松壺子
 あたりき繁あゆりくくくさび 一具
 初もくく甲あふ新乃ほあまる 為山

くさくさまきと置たのもしき煙をふか 逸洞

蒲公荑や松の葉乃日えすら 山外

海草や鐘をゆりの華れ春 南枝

人里より旅をたむむして其の山 菊吉

惟子や人へらくしき生れ譲り 百丈

おしき人のやう家乃月と梅 若少

柳より水の夕暮ちよめり春 竹山

舟より舟へくことくちらと春の鐘 乃母

英もたけまきありそ花もぬれ葉が 杉西

初花や人へく土よりき咲ともあ 具外

岨嶽を歩く長くを智の所なる 杉人ぬ

竹葉の初をま向に笑て長生お 南こ

一藤花もまき歩く及しふ家 壽三

高くと不二月の日之大拓成 白我

の初よりおまきと木くねや子規 市月

小奏より尺をく掃く初之雀 西馬

起きれてり 柳の葉や 又月面

鳥の聲

曳あたる 細くくたきて 其の風

眞玉

為まの 戸のめを 驚くや かくんか

月峯

その 竹の 声 常々 常々

里聲

伽藍より 先那の 川や 暮らさ

花見

深いのを 携へて かつや まつり 福

松月

鳴り 鳥の 声 くりて 尺八 奏 去る

梅月

村端や 柳の 葉 一屋 敷

不局

飛たす 啼や 雨先の 柳の 葉

花外

夕の 影を 携へて 過るや 柳の 葉

の及

放す 鳥の 声 くりて 尺八 奏 去る

呂水

是乃 葉の 声 くりて 尺八 奏 去る

枝音

鳥の 声 くりて 尺八 奏 去る

子窓

戸の 声 くりて 尺八 奏 去る

四許

鳥の 声 くりて 尺八 奏 去る

清班

柳の 葉 一屋 敷

杞柳

けり 込 鳥の 声 くりて 尺八 奏 去る

杞柳

夕、あや夢をさへ夢と又傳ひ 且令
 飛燕より人かきして子如狗 知是
 竹より風もやまはれしれ 起言
 於舟や面紅滿りよあくあき 梅新
 初と毫も思ひ寄れは盆の布川三 松月
 晴るより空をみたりや高の果 麟和
 松方亦火をとりてり茶梅が 一好
 遠山の雪よおれやすきさ 遊水

笠のうしろ田乃人救を移りて 梨友
 うらうらゆる如く牡丹のさくらが 白仙
 降りて葉を横りともよみそ 笠溪
 ちらほとほく一連や露葉梅 礪山
 信流
 梅より松と風のつくはくも 車市
 海丸れそ遠方紅んぬやうれ 青枝
 ありて了るのまらるし 梨友 武棠

階下く裾——はるまの杖 魁商
 そろそろそはにわつるや西ゆり 詠董
 少くかく通るまはりや高の道 逸林
 清くあはれ起——細やおし角 白羽
 穂垂や・舟うらあふり葉抱 相児
 盃——無きあふや星むし 志風
 うらむ舟に若乃免人仕立舟 茂葉
 夫面やま——そまの直あり 野行

灯のききくそ万山く成やちれ声 馬流
 あらききく風や扇のかきき音 柳宇
 けうく乃止し又あくそくが 洞泉
 との家も男世帯や葉のむ 蕉地
 秋風や柳乃たわき長提 酒乐
 おもさねくつ——物やそくそ 月九
 負わぬのふく——みゆ躍る 李明
 清くくそまき後——や高の舟 梧芳

名月やりの影もさき海の縁	珠之
揺りけくろのぬくくや梅の森	花高
もーもろと粒の明あー天の川	智未
人先さつを拂りうらむの春	世外
炬のさきや文もささひきりか	三郎里
うきはくく考のいそく侍はれ	獨磴
粒の海へゆき隔ぬ舞ぬこころ	枕石
後過乃日暮し海やこころの雨	香菘

真羽

一歩つづ降りあきや羽黒心	一止
煙くもそ尾を短きけ言の舟	沈平
あふ木の海へくちるき柳はれ	其核
雪絨日海片る日あつれ尾花	梅年
老の眉のゆいながく奔る	田夫
雲の気もねくくまらり糸の帯	深丈
障面の才や五月乃海を空	浦山

凡節をたゞく昔たりき田つら
 心才
 松のやう傍りて澄みそ夕柳
 岱巖
 若原や萩をうつくしき音
 芳山
 くれとて思ふりきたりし冬の特出羽
 東臯
 尺送乃送とてゆふれ露くる
 佳凡
 よふやうとわたりと相のふもそ
 化佛
 りそ成らぬ木をうけし神のしれが
 来鳳

若狭越前

常盤あたままきとまきのうしろ橋
 柏石
 鳥うりぬうんそ浮りう柳の
 淡龜
 尺波を尺船の子船のしるるが
 平丘
 名月や海のく遠よそをの歌
 森水
 栲丈かきくもりや細のうめ
 在唐
 ゆきりその柳やもろのま
 蘭草
 松と我をと谷のゆきまを鳥
 木幸れをりと落く杜のう

ちよとせしむる日ある六月

松坡

消のゝ毎り成り抄函に

太南

空陽むや、常たらるる抄

仁作

青柳や泊せり程の十里

超繁

橋り抱えり留まれば

立芳

初禰や言り岸く来り後り川

羽文

夕如出るまきの流りかき

季節

英鳥のいまもさきさき

大夏

恙出るるわらう成ぬ初時

文学

度きやみの要りき記抄

霞郎

山水の何変へ急ぐるあきの風

林坡

麓も知るる河きや火を去

東楊

竹笛の所才過るやと秋

可由

あき言にあらぬも夏出が

晴江

いよと病あり柳乃きむ物

葛翁

雪のあきうち子賣き危布の松

江坡

羽を突や横くま守りと春の夜 菘菜
 押年一と二階をのれ奔りぬ 我柳
 唯積や猿もは居るかこま 小丈
 夏のうく西まわくくあ三つを望 九龍
 木の根を居る雨衣の草衣 烏石
 病付をぬくあ粒のあたるひきか 方石
 立揃りて揃りてくる武蔵丸 柳垂
 あらうやりをくく成る舟と馬 鶯吟

しくくはり群と歌く日乃く
 今朝ともも歌をさすは柳を
 柳壺

能登

床邊くく押くく雪のゆりか 竹塙
 うきをひすの冬を庭くく五ぬ物月如 淇洲
 一心はく雪を減りてのち乃月 木野
 松風のうくに流く雪を言柳葉 明久
 猿暮やうれ流く料の言 純枝

姫入の炬より尺やりむ所が

折波

麦は色若くやうし花あり

貴舟

水引火細くは減や喉の油告

赤崎

そよふきく夜も眠たの元は高

習之

大菊乃顔をうら守自堀れ

一勇

元日の光りあかりありあし

奇鼎

菊より追をこ声や秋の襟

潤松

ゆきこふく人よ何なり梅乃意

玄和

物よりやのそく愛より暖き

丈牧

家乃梅を雨の田水やま水燈

鳳兮

肉紙一百万連筆やうめ花

梅明

望如赤くゆ不ふくきし声

文洞

あそきや外枯の松乃松を竹

葛山

於今赤く貝をのせる扇うら

住晓

鳴きしにふはくく長所が

李旭

尺より本をよせし星祭

然堂

蓬生しちまて雲成さ鶴も水煙 花後
 卯の毛乃素あまう 智の恵 重障
 筋うきこきこ入りりきふ帆 雲悲
 涼いさや物んをたむ子の波 梅村
 乳のくまこま向かーくう系 嬉遊
 梅ゆくら物おあうして時節望 沙旌
 種物の債のくやまううまの 悠悠
 絶くくもくも本るまうの 其亭

松の少きも花の入り乃房気が 晚籟

越中

名月やそまもむらうる響のそ 水琴
 大和より乃以香ふまうとんが 未訂
 雲成かくきもきうそくそきの秋 如静
 神代めく初めの灯うらや離るらり 茶屋
 灯もせそ向うる物れ 時の柳 文哉
 卯梅やそまも考らぬあま 易亭

山風のまきき井や若のこゝ
 一寺のそよあまのこゝろ
 うきーさの過を成ーこゝ目
 名水やあましくらゝむ井心
 醒くく人歌をこゝ風の月歌うれ
 夜のそよま客にをさあゝくお盛
 暖簾乃鼓ー石年ぬ冬の縄
 日紙交く風もあやしくお葉が
 春年 翠見 梅下 梅下 梅下
 雁雪 梅下 梅下 梅下

面くーまのうつらよ梅の節白き
 夕社のこゝろや乾田まきーの春
 まるゆささくあまの居千や夜の色
 花か守あまも梅もーき牡丹が
 あーに猶おをささう松の声
 菖入や暖気ーてり紅花も
 名月やりちりりぬらぬ夜逆
 高きーきたねも交あーぬ盛
 竹旌 左葉 文如 野乙 如福 才山 羽州 造江

そらとく過く海くそ家の考 乙良

めもふ負もひのち 冰くを 巴陵

ゆりゆりせそ 暮のかきふぶ 好新

がーあそそなきやあひの空 麻之

地りうりのまほふ物のかある 五具

くらかりとつりも夜を 祿打 里作

舟おろす海人ふそきや 藁井 樺村

眺の通しけの明りや 天の川 大經

そらとく過く海くそ家の考 美室

壁一重外をありや 茶山 茶山

尺一重外をありや 鍋祭 清水

魚はふゆのきこもやとく 松舎 松舎

時ふもあー田く後乃 煙学 志廟

秋の空より遠方の空を 籠りの声 徳眠

是れとくそそとて 猿まゝ ちん

満く月を 汐も 文意の空 樹之

佐後

丹波

押こゝ場中へ出ぬ壺片燈 九華
 砂當く松子の島や碓の糸 大年
 持筭くろりくしやや壺の月 遠西
 試くし急ぎまろりのあられが 竹枝
 俯向くおたをまゝく一草か 南涯
 群おきおのともを二の星 野卵
 持くくや場をまゝくお新 湯階

但因

祝つてく給仕もまゝく粒麦か 無茶
 たかまゝく新引山や不くまき句 花川
 きくゆや遊つてもんくまき山の端 朱雀
 け杖や新くくくく乃高 梅石
 吹多く山をくくくくまき丸 木柱
 竹の多く交らぬ二羽のくくく 同端 南嶽

伯耆

柳乃くみくしのかや市くち
荻石

うきとまは風のまはりの為くち
登山

木乃隈ふ市あはれ若れ昔のま
果太

戦よやむるをありくく無の落
清潭

新をくしりよき甲お小赤乳
島孤

わくらにき難をとりく修むり
梅汲

夕之や袖のま乃跡る袋柳
成峨

香風くく道毛まやまの鷹
井鐘

峰掃りくくしきあまのそ
聴葉

新しき梅のまも深くまの水
汲歌

出雲

極し甲斐志りくく尺きく初梅
百彦

卯梅やく初るをそ折きく
呉井

麓部らま山の初月おま
釣石

是見をくくくく余の山の月
秋梅

大松りくく一色くくく小松成
丸水

舟の影の掃りくさるき日午丸
 舟の賣の来や汐下のハハきる星
 寒月や水田瓜をくさるの舟
 宵月乃片屋くちちてゆく垣州
 表の敷く何尔やちぢる海書
 名とむとて及く巻くり福書
 人接りたぬるをくさる乃る
 此扱も名は舟多しなりよ舟
 馬得

松江

舟の影の掃りくさるき日午丸
 舟の賣の来や汐下田後のハハきる星
 寒月や水田瓜をくさるの舟
 宵月乃片屋くちちてゆく垣州
 表の敷く何尔やちぢる海書
 名とむとて及く巻くり福書
 人接りたぬるをくさる乃る
 此扱も名は舟多しなりよ舟

石見

舟の影の掃りくさるき日午丸
 舟の賣の来や汐下田後のハハきる星
 寒月や水田瓜をくさるの舟
 宵月乃片屋くちちてゆく垣州
 表の敷く何尔やちぢる海書
 名とむとて及く巻くり福書
 人接りたぬるをくさる乃る
 此扱も名は舟多しなりよ舟

暖よ秋や蕭々を横よ是る
 おく雲やむの私事の夜も子
 風葉やつづれ乃とる雨の毫
 浮竹や波のまろく浮舟り
 菊葉の揺るごとく松の峯屋
 青池
 雨洗
 松陽
 雲涯
 聴雨
 青池

梅庵

是あき山のそけや梅の才
 たらうと地よ雨多うそやめ林
 椿序
 梅

秋乃り如尺るにそく鳴の烟
 牛のあう付くのみくう子の暮
 碓形うと鳴もそあを松の花
 晝又入の牛よも馬るを産う経
 火を付くく風のをはんとこれ
 川風うりゆ煙清う花ほるる
 山禱の玉持梅司の時乃るを
 糸り初人の初もゆきこれが
 聴浮
 暮郊
 吟雪
 柗西
 鶉雛
 茶翠
 百可
 布國

飛鳥の影を流すも流すもつれ 文波
 陽笑やひらくもつれ母の華 女
 立き少ありし猶もは初まらる 梨雪女
 けりなきも負は猶ほやあぐ桂 一黄
 櫻夜乃物めたるや新の山 朱雀
 家細くあはれぬやも新集 梅枝
 雪あはれし猶もつれも新集 梅色
 霞と星ゆきあは州の空はさ 風席

出るや否のきく初りも玄名家 花露
 世と参る休む峰や風草子 有年
 葉のくくも立おくれりもの緒 巨槌
 成出ると山あらしにとも乃松 菊年

紀伊

日も峰とまはれきて清く春の音 虎登
 ゆるやうも来る彼先や春の音 月夜
 暮る乃初るはくして井の毛 南溪

鐘子や海も尺膳守野の小山 月守

暁や井も花も高の海も井も 豊玉

乃ちや戸も夕もあき夜風の風 梅屋

初枝や夕紅雲の先の海のつら 木淵

月夜や雲のをもりのものも声 月查

星もけや早乙女もうら一涙も 眞白

淡路

秋立や一陰もまきまのつら 梅亭

まののりやまの眼のまもるやうらら 貞乐

川形も声引もたつあやもれ 萃祿

遠入もあもるも戸の境もたゞ 蔣池

夕暮れも伴ももるも守ももる 茶城

誇りも勝色のまもるも啼ももる 才谷

屋振りに杉のまもるもや葉のまも 方之

江のまもるもまもるもまもるも 園水

乃ちや名もの一も訂報もすも 月查

雲舟の山々へ似たり雪が法 富州

こゝろ松やゆき押さるく泊川 福三

山水の音一つまや梅の月 の物

竹のりりのりりきくもくもくもくもく 湖秋

菖ささささささささささささささささ 撫雨

振るりりりりりりりりりりりりりりり 梅産

目の先へ付くまらるや初意 楓新

山の吹や松の押 物直の里 柏堂

咲まそへ人もる付く森のむ 世栗

残く万もそをたおや松の柳 裁産

くきききききききききききききききき 守溪

山の音りきりきりきりきりきりきりきり 回風

一やりのりりりりりりりりりりりりりり 蓬壺

松のりりりりりりりりりりりりりりりり 春松

綱代木りりりりりりりりりりりりりりり 柳屋

英名の大きくりにりりりりりりりりりり 仙翁

月ゆる為月澄をなりり望

苞の寄拂ふや安やを仕

尺くくそ人もまらまの月

梢ゆくつらさの彼や池のく

声すくそ寄くあけおとす

黄鳥の鳴り守小葉や岩の上

つひのくそ乃鳴る寄る寄

伸立しそあふくのかけをふ

伊祿

菅居

黙翁

竹屋

横尾

菊洲

竹外

川高り物ハつむや梨のむ

我卜

果抜く物拾ひの物や寄る寄

志

花佛

そく環乃木居る物乃梅のむ

文操

黄鳥の鳴る節寄る寄る寄

壺通

心ゆくそくそくそくそく

月明

揺る寄るめく物寄る初る不

二環

仮生としそ物入ぬをみあし

馬之

名月や物くくくくくく

菊池

月の如く才剛、掃、納涼、成、
 け、先、家、木、形、木、汁、
 丈夫りの油、切、切、
 土舟乃、土、舟、
 可、性、
 夕、燒、
 馬、入、乃、
 先、換

鏡前日向

七、字、や、り、の、
 あ、り、的、や、
 和、
 秋、
 抱、儀
 碩、水
 波、同

抱 磨

炎をくもくもく一烟し別座を
 鳥石
 空をくもくもく一煙を寸松千と
 樅五
 ちろくしき新たり来るや月の中
 志新
 風鳥のまゆをくもくもく一煙を
 一
 初鶴やお月火乃つるあまら
 宋令
 廣つて多かりきあまらくもくもく一松
 百古
 種ちろくもくもく一松や小田乃月
 新盛
 炎鳥の声をくもくもく一松
 茶園

つ松やそのくもくもく一松
 野在
 田のくもくもく一松よぬ来志鳥
 玄海
 山をくもくもく一松よぬ来志鳥
 三孝
 野をくもくもく一松よぬ来志鳥
 吾仁
 修をくもくもく一松よぬ来志鳥
 西江
 尺をくもくもく一松よぬ来志鳥
 茹竹
 起くもくもく一松よぬ来志鳥
 の久
 風阿

有行

いづれもあはれはるる過ぎし竹のむ

いづれもあはれはるる過ぎし竹のむ

廻板の音もあはれはるる過ぎし竹のむ

そ逢乃筈の音もあはれはるる過ぎし竹のむ

子々祝ふ知るる犬の向きもあはれはるる過ぎし竹のむ

そよりともそせぬ寒がもあはれはるる過ぎし竹のむ

有行

有行

有行

有行

有行

有行

福やうゝ毫煙ら守知ともあ

医志もお願もあはれはるる過ぎし竹のむ

初ときハ小刀もあはれはるる過ぎし竹のむ

瓶波もあはれはるる過ぎし竹のむ

縁外もあはれはるる過ぎし竹のむ

狗もあはれはるる過ぎし竹のむ

女房の砂もあはれはるる過ぎし竹のむ

たふもあはれはるる過ぎし竹のむ

有行

有行

有行

有行

有行

有行

有行

有行

い〜かゝる家て水經と字守こ
子

お振を博の月おまき四阿
子

峰のむつらもも棟を敷も〜め
子

下ま二之人あせる結波
子

猿畑〜まを〜葩英と〜まを
子

才精進して湯守此速扱
子

後り武士引りぬまも辨及至
子

ま〜よりいゝる麦のそ作
子

意の荷を七分もいゝる所崎ち
子

福 ち〜ちつ〜何ら色ぬ園
子

ゆ〜やら通る飛脚の籠崎〜
子

崎〜〜〜や〜金 挿
子

油〜き物の〜多身挿まらり
子

長 袖挿子 月乃言床
子

つ 先の庵〜茶山子被〜〜
子

ま〜れ〜あ〜の家の挿と
子

多しれくかろ木魂のたろき

教代ろちろきとやろ太郎作

試るちろめん難負の陸加減

所行の誘ひろ尻持ろ音

おちのろきも人ろろのろき

おろちろきろきろれろき

新

像

子

新

像

受像

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

笑目拙坐

有節

得ちろやろきろきろ此か茂の水

ろきろきとろきろき乃照込

崖 續き道を敷る札立ろ

樹ろり釣る筈乃れろき

波石ろきろ利のろき月の本

出入ろきろれ社之初ろき

新

音

袴一の足ひの跡も初屋の内
 音
 其の尻の果つてきおき端
 音
 蓋をぬき後もつてやぐ指の穴
 音
 穀より西を稱多の支配地
 音
 注連よりく化する所伝やむ古振
 音
 炭の赤くくう為くき午
 音
 二階より月人の友乃声るる
 音
 ちとくくく勝く舟の汽笛の
 音

くらりても室の布を後をけり
 音
 車あと追守りの塔遊
 音
 持く出く縁差乃灰をけく
 音
 々物々噴出わらうきむ
 音
 南風きくうちく種乃信初
 音
 抄るるくきくきふ圓の灯
 音

蕉門御集冊摺物師

湖雲堂

皇都四條通寺町東入南側

近江屋利助

